

## なぜこの本を書いたか

私は漁業のフィールド研究者として駆け出しの人間である。おそらく、この「北水ブックス」シリーズを執筆させていただいている研究者としては最も若いと思う（嫌味ではない）。未だに、博士や先生と呼ばれることはプレッシャーに感じるし、いつも先輩研究者や現場のベテラン漁師と話すときにびくびくしている小心者である。このように一人で本を書く機会など、もっと人として味がしみしみになってから訪れるものだと思っていた。それでも、これから研究者を目指す人たち、海や水産に関わろうとする人たちの気持ちに寄り添って、背中を押せるような本を書いてみたかった。

突然だが、谷川俊太郎さんの詩のひとつに「おべんとうの歌」というものがある。「魔法壇のお茶が ちっともさめてないことに 何度でも感激するのだ 白いごはんの中から 梅干が顔を出す瞬間に いつもスリルを覚えるのだ」と始まり、日常の何でもないふとしたときに消えてしまうような幸せや感情をつづって、人それぞれの幸せや不幸せをどのようにわかちあうのか、疑問をなげかけている歌である。人それぞれ解釈の仕方はあるだろうが、私はこの歌で挙げられている「ふと幸せを感じる瞬間」にとても共感したのを覚えている。人生は選択の連続だとよく言うけれど、他人の感じている何に共感し、何に共感しなかったかが、その選択を大きく変えると思う。私自身も、自然が大好きな家族の存在や、水産業界を背負って立つ人たちの言葉やわくわくした気持ち、上手くいくことばかりじゃない愚痴に共感してここに立ち、漁業や生き物の研究を続けている。

研究をやっていると、「この瞬間のために自分は研究をやっていたんだな」と思うときがある。それ以外は、自分のやりたいことをやっているはずでも、しんどかったり理不尽だったりすることばかりだ。ただ、このような生きがいを感じないまま体が動かなくなってしまうのはつまらないし、もったいないことだと思う。この本は誰かの共感のきっかけになればいいなと思い、これま

で私が漁法や計測に焦点をあてて海や水中生物の研究をしてきたなかで、また学生から院生、若手研究者と呼ばれるようになるまで生活のなかで感じたことを詰め込んだ。専門分野の漁業の話に加えて、海や水辺でのフィールド研究という特殊な話なので、もちろん珍しく面白い話もたくさんある。それでも、楽しさだけでなく、研究や調査のつらさ、さみしさ、また自然の怖さについても触れている。私の経験したことというフィルターを通してではあるが、何よりも、こんな世界や可能性があることを想像してワクワクしてほしい。話に少しでも共感してくれたなら心からうれしく思うし、共感しないならそれでもいい。

最後に、海洋環境をはじめ地球環境の変動は予測できない状況になりつつある。これからも、環境の変動や人口の減少は顕著になっていくだろう。また情報通信技術が発達したことで、私たちは日常的に、朝から晩までスマートフォンの文字や画像を追いかけて情報を取捨選択するようになった。こうした現代、将来を生きるからこそ、何より自分の身体と感覚をもって自然環境や生き物、産業、人間活動の移り変わりを感じ取ることが重要だと思う。とくに自身の断片的な経験を客観的に分析し、目の前の情報の山から科学的根拠に基づいて情報を選択できる力が、これから最も大切になるだろう。本書のタイトル「海で身体のすべてを耳にする」は、私の好きな言葉「I'm all ears（熱心に聞く、興味津々）」へのオマージュである。目の前の話や状況を全身でもって感じて興味津々な様子が、ありありと目に浮かぶ言葉である。本書の内容が、海洋や水産、学術研究分野への興味のきっかけとなれば幸いである。

# 第1章 船でうきうき

## 酔うから船に乗りたくない

のっけから矛盾したタイトルに苦情が寄せられそうである。いまでは私は、海の生き物の移動や漁業との関係の研究をしていて、漁師さんの船に乗せてもらったり、調査船に乗ったり、練習船で学生と実習したりしている。しかし、初対面の研究分野が違う人や、私を昔から知る友人・家族にはいつも言われることがある。それは「船酔いしないの?」ということだ。フィールド研究者なんて名乗っている手前「酔ったことなどない!」と言いたいところだが(言っているかも)、答えは「ノー」だ。酔う。とても。すごく。いつも学生の指導や調査の手前、何ともないような顔をして、時には「船酔い? 大丈夫か?」なんて頼りがいのありそうな姿で励ましを言っているときもある。それで騙さ……わかってくれればいいが、実のところ心の隅に小さな不安を抱えながらいつも船に乗っている。海を舞台としたフィールド研究者がなんとも情けない姿である。

しかし、ここで伝えたいのは私が船酔いチャンピオンだ! というのではなく、船酔いが心配で海に出るのを悩んでいる学生や若者の気持ちが心からわかるということだ。現在、大学の水産学部という船に近い分野で学生を教える立場になって、学部の学生からも水産学部を目指そうかなと思っている高校生からも「船酔いが心配で……」「船酔いしんどかったから船に乗る研究は……」という声を聞いている。自分で思っていた以上に船酔いへの不安は将来の選択肢を狭めている。よくテレビで船に乗ってタレントが獲れたての魚や釣りの現場をレポートするときにも、出港してしばらくするとだいたい船酔いの話題が始まり、ネガティブな印象を与えている。いかにも気持ち悪そうな青白い顔のタレントを見ると心からその気分に同情するのだが、それではみんな船に乗ら



なくなってしまう。私はそんな不安を抱える人にこそ懲りずに船に乗ってほしい。「酔うから船に乗りたくない」は人生の損なのだ。

私自身、典型的な車酔いのひどい人間だ。子供のころのキャンプや旅行の思い出のなかには必ずと言っていいほど車酔いやフェリーでの船酔いの記憶がある。都合のいいハウツー本ならここで「そんな私に転機が訪れたのが……」なんて紹介するのだろうが、私の酔いの歴史にはそんなものはなかった。「でっかい自然で研究がしたい」と考えて入学した大学は、北海道で海や魚について教えている水産学部であった。その夢がはじめて叶った船の実習でも私はしっかり船酔いして、晩ごはんのマーボーを吐き出した。でも海の上に立ち、海の底から採れた水の冷たさや、トロールという網を引っ張る調査で獲れた図鑑でしか知らない魚たちの姿や匂い、イカを釣るための糸の重さや釣りあげたイカに噛まれた痛さ（イカって噛むんです）は深く記憶に焼き付いている。研究室というものに配属されて初めての調査は、北海道で学生をしているのに九州の豊後水道という所で知らない漁船に乗せてもらって、タチウオというこれまた馴染みのない魚の調査をすることだった。日本有数の潮が速い海で、船がとても心地よく揺れるだけならまだしも、船の縁に叩きつけられるような波の日もあって、陸に二度と戻れなくなるような恐ろしさも感じた。そんななかでも船を操り優しい声をかけてくれた漁師さん、どんなときも調査を遂行する水産研究センター（現、水産研究・教育機構）の調査員さんや研究室の研究員さんを心から尊敬した。

院生になって行った藻場の調査では、取りたてのダイビングライセンスで潜水調査をして、それまで2次元だった海の世界が3次元に広がった。海のな

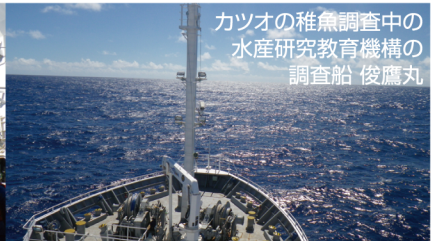


かにもコンブやアカモクがつくる森林があることを全身で感じた。でも潜水の練習中にもしっかり吐いたし（後の研究テーマである集魚を体現した瞬間である）、潜水から上がってくる先生に吐しゃ物をプレゼントしたこともあった。でもゲロまみれになっても研究者になって、海に出る調査をずっと続けたいと思い始めていた。それから調査船に1か月近く乗ってベーリング海でサケに埋もれたり、地図帳でしか知らなかったマリアナ海溝のあたりでカツオの稚魚を探したりした。カツオ一本釣りの船で2か月くらい漁師と船上生活もした。その間、船酔いと闘わなかった日はなかったと言える。日本最西端の与那国島に行って黒潮の源流付近で魚を追いかける調査をしたときは、胃液のあとに胆汁みたいなのが出るほど吐いた。そんな私は、いまま漁船や練習船やフェリーに積極的に乗って研究者をしている。人生わからないものだし、なんとかなるのだと思う。

ここまで、どこに需要があるかわからない船酔いダイジェストをお送りしてきた。船酔いする人々には「こんなやつも船に乗って研究してるんだ」と心の支えにしてほしいし、また生まれてこのかた船酔いをしたことがないという人



ベーリング海でのサケ調査中の  
水産研究教育機構の調査船 北光丸



カツオの稚魚調査中の  
水産研究教育機構の  
調査船 俊鷹丸



与那国島で  
黒潮源流に揺られるトローリング漁船



6週間カツオ漁を共にした一本釣り漁船

にはブツダのようなやさしい心を持ってほしい。また察しのいい読者ならもうお気づきだろうが、船酔いしなくなるような魔法のハウツーは少なくともこの本には存在しない。いつかどこかで何かが起きるのだと思っている学生諸君は早くあきらめることをお勧める。そんなものにすぎると、吐いて楽になって早く自分の感覚を研ぎ澄ますべきだ。ベッドで横になっている瞬間は次の日曜日でも経験できるが、いま目の前の海で起きていることには二度と出会えないかも知れない。

誤解のないように明言しておく、「酔わなくなる」ことは無理でも、「酔いと闘いに慣れる」ことは可能だ。さすがに何度も船酔いするなかで、何をしたら酔いは来るのか、どうしたら乗り切れるかの法則が自分なりにできてくる。何より酔いと闘いは自分の意識と闘いで、「心の余裕を持つ」としか言いようがない。北海道で有名なツ〇ハドラッグでいい値段で売っている酔い止め薬も、ほとんどの有効成分は気持ちの鎮静作用であると筆者は勝手に思っている。余裕を持つための方法は何でもいい。自分で実感するしかない。酔い止め薬を寝る前に飲むでも、ご飯だけは絶対に胃に何かしら入れるでもかまわない。私はこれからも間違いなく船酔いに悩まされるが、無数の自分のルールやジンクスを守ることで、船旅に不安を覚えることはちょっとしかない。



底延縄操業中の北海道大学練習船うしお丸

北海道大学厚岸実験所練習船うみあいさ

本当に伝えたいことは船酔いのしんどさでも乗り切る方法でもなくて、それでも船に乗るのは面白いんだということだ。どうか私と同じように船酔いに悩まされていて、心に余裕を持ただなんて無責任なことを言うな！と思った人も、船に乗ることを嫌にならないでほしい。どうか世界を閉ざさないでほしい。これから書くように、船でしか行けない場所、出会えない生き物はたくさんある。それら未知の存在に出会ったときに自分が感じることこそ、一生胸に残るものになる。こうした感動に比べたら、船酔いなんて小さい悩み事……とは言わない。だってしんどいもの。それでも、対策して船に乗ろうかな、と思えるはずだ。

## ゴールドとコバルトブルーを抱きしめる

古来より金きんは人の心を乱し、欲を湧きたてるものとされてきた。長い歴史のなかで多くの人が金銀財宝をめぐる争い合ってきたにもかかわらず、違う時代の誰かがまた同じことを繰り返していく。私たちは莫大な財宝を目の前にして、その魔力に取りつかれてしまうのだ。子供の頃、「絶対に金はない」とわかりながらも、徳川の埋蔵金が眠るという土地で大規模な掘削作業を行うテレビ番組に父と一緒に目を輝かせたのも金の魔力だったのであろう。

え、何の話？ と思ったそこの方。魚の世界でも金は人の心をざわつかせるのだ。次頁の写真の美しい魚を知っているだろうか。インターネットで「鱈」や「シイラ」と調べると、はっと息を呑むようなゴールドとコバルトブルーを身にまとった魚が現れるはずだ。

この魚、マグロやイワシのようにスーパーで見かける魚ではないが（少なくとも私の出身地の関東と北海道では）、南の温かい海ではたいへんメジャーな魚である。ハワイではマヒマヒという名前でも高級魚として扱われている。アメリカ西海岸ではマヒマヒタコスというキャッチーな名前の料理で有名であるから、南の島のリゾートで目にした人も多いかもしれない。地中海に浮かぶマルタ島では Lampuki ランプーキという名前でもシイラが食文化に根付いており、沖に浮かべた構造物（浮漁礁という）にシイラを集めて獲る漁業が伝統的に



曳縄で漁獲されたシイラ。  
成熟したオスになると頭がこぶのように突き出てくる。

われている。英語ではシイラは Dolphinfish といい、イルカのように猛スピードで泳ぎ回って跳ね回るやんちゃな奴という意味である。体がスマートな流線型で、尾のヒレが長く三日月に近い形なのは高速で効率的に泳ぐ魚（カジキなど）の特徴だ。釣り上げた後に船で暴れ回って危ないのだが、釣り針に食いついてからのやんちゃぶりを求めて、レクリエーショナルフィッシング（遊漁）の対象としても人気が高い。ちなみに身の味はちっともやんちゃではなく、柔らかく淡泊だ。

何が言いたいかという、徳川の埋蔵金と同じく、この魚も絶妙に人の心を魅了して止まないのだ。金ピカ、コバルトブルー、速い、強い。ドラゴンボールと同じ要素を兼ね備えている。おまけに美しいゴールドとコバルトブルーの体色は、生きているときにしか見られない“生命の色”なのだ。内陸育ちで開高健の『フィッシュ・オン』や『オーパ!』を読んで大きな魚にあこがれてい



国際学会で訪れたマヒマヒの本場サンディエゴと  
マヒマヒのタコス



た少年時代の筆者は「こんなカッコいい魚がいるんだ!」とお魚図鑑のシイラに憑りつかれた。小学校の美術の授業ではこの魚と自分が並んだ絵を何枚も描いた。シイラに会いたくて関東中の水族館を探し回ったこともある。でも、そもそも南の海に住むシイラを関東に輸送して飼育するのが難しい。なかなか簡単に会うことはできなかった。一度だけ、クロマグロを飼育している葛西臨海水族園の巨大な水槽でシイラらしき魚の影を見た気がしたが、少年時代のピンボケ写真ではわからなかった。



すっかり時は経ち、広大なフィールドへの憧れを持って北海道大学水産学部の学生になった頃、シイラへの思いはすっかり失われていた。そもそも北海道にはいないと思っていた。そんななか、幼い頃の憧れに出会ったのは、実習で練習船に乗ったときのことだった。学生時代に所属していた海洋資源科学科は、漁業などの漁労作業や船での実習を体験できるプログラムにあふれていた。とくにこの学科の沿岸実習は、少人数で小型の練習船に乗り込み、比較的陸から近い沿岸の海のことを調べたり、魚を獲ったりと、まさに実学を体現している授業であった。さらに当時参加した「マグロ延縄実習」は、有名な大間<sup>はえなわ</sup>のマグロや戸井のマグロとほぼ同じ海のマグロを研究のために捕獲し、捕獲方法や研究方法について学び体験できるという素晴らしいプログラムであった。ちなみに延縄というのは、針と餌がいくつもついた長く伸びた縄を海に漂流させたり、海底に固定したりして魚を獲る方法である（写真）。とくにマグロやブリのような広くそして速く回遊する魚を漁獲するためには、前者の縄をプカブカと漂流させる方法が用いられている。

しかしながら、マグロ実習と名前がついているにもかかわらず、私が乗船した当時、この実習でマグロが獲れることは絶対にない！ というのが先輩や先生たちのもっぱらの噂であり、船の船員さんですら「マグロなんて釣れるわけ



延縄の例。これはタラやホッケなど底魚を対象とした底延縄。灰色の幹となるラインからピンク色の枝となる糸が無数に出ており、餌と針がついている。